

山王信仰

五島列島の主な島で最北に位置する中通島にある山王山は、遠い昔から信仰の対象であった。山の斜面にそびえ立つ崖や洞窟は、神の領域と考えられていた。信者はそこで儀式を行い、中には長期にわたって山にこもり、精神修養をする人もいた。

やがて、山王山は天台宗の開祖である最澄（767-822）の教えを受け継ぐ山王信仰と結びついた。山王信仰は天台宗の総本山である京都の比叡山を信仰し、その山の神々を天台の守護神、諸仏・諸菩薩の化身とするものである。山王信仰がどのように中通島に伝わったかは不明だが、中世の商人や僧侶が五島を経由して中国と日本の間を行き来して持ち込んだのではないかとの説もある。

山王山には 13 世紀後半から 18 世紀にかけての銅鏡 17 枚が発見された二ノ宮の岩窟をはじめ、古代・中世の信仰の場がいくつか確認されている。この鏡は、魂をとらえる神秘的な祈りの道具とされ、信者が宗教的な意味のある場所に置いていったことが知られている。

現在、山王山には 4 つの神社が残っている。山頂への登山道入り口付近には遥拝所があり、遠くから山の神々に祈りを捧げることができる。そこから一ノ宮神社、二ノ宮岩窟を経て、急な坂道でさらに 2 つの神社がある、標高 439m の山頂に向かう。山頂には展望台もあり、五島列島を一望できる。